主立坑の埋め戻し完了を確認【超深地層研究所安全確認委員会】

日本原子力研究開発機構の
東濃地科学センター（伊藤洋昭所長）は、
瑞浪超深地層研究所（瑞浪市明世町山野内）の
地上施設について、解体作業を終えた。
本日、「令和３（２０２１）年度・
超深地層研究所安全確認委員会」
（委員長＝水野光二瑞浪市長）が開かれ、
関係者約３０人が、同研究所の現地確認を行った。

瑞浪超深地層研究所は、瑞浪市の市有地にあり、原子力発電で発生する高レベル放射性廃棄物を、安全に地層処分するための「地層科学研究」（基盤的な研究開発）を実施。地下に研究坑道を掘削し、平成２３（２０１１）年には、換気立坑・主立坑ともに深度５００メートルに到達した。

坑道での研究がほぼ終了したため、瑞浪市の水野光二市長は、「土地賃貸借期間の終了を迎える、２０２２（令和４／平成３４）年１月１６日までに、坑道を埋め戻すなど、原状回復をした上で、瑞浪市に返還すべき」と発言。これを受けて、東濃地科学センターは、昨年、令和２（２０２０）年２月４日に、「研究坑道埋め戻し着手式」を開いた。

本日は、委員らによる現地確認の後、瑞浪市民体育館（明世町戸狩）で、超深地層研究所安全確認委員会を開催。東濃地科学センターの小出馨副所長が、坑道の埋め立て状況などを説明した。昨日、１１月１８日（木曜日）に、「主立坑」の埋め立ては完了。「換気立坑」については、本日現在、深度１１メートルまで埋め立てており、予定では１２月上旬に、完了するとのこと。

なお、土地賃貸借期間の終了時《２０２２（令和４／平成３４）年１月１６日》には、いったん用地全体を、瑞浪市に返還。その後、地下水の環境モニタリング調査のために、必要な用地をあらためて、瑞浪市から借用する。研究所の基礎コンクリートや、杭（地中深さ約１０メートル）は、地下水の環境モニタリング調査の終了後に撤去《令和９（２０２７）年１２月ごろ》。その後、用地の整地を行い、すべての作業が完了する《令和１０（２０２８）年３月までを予定》。